

小学校音楽科における器楽教材についての考察

—新学習指導要領に対応した音楽要素の学習のための器楽教材の開発—

大学院教育学研究科芸術教育専攻音楽科教育学領域

安田沙有理

子どもは楽器に強い興味関心を持っている。この興味関心を原動力に音楽を学習することができれば理想的だ。しかし小学校で行われている音楽科授業では、歌唱中心の授業が展開され、楽器に触れる機会は少ない。筆者が小学生のときを振り返ってみても、器楽の授業といえりコーダーをただ吹くだけで終わる授業でしかなかった。このように歌唱活動の付け足しのように行われている音楽科授業からは、楽器の音色を味わったり演奏表現を工夫したりするといった器楽の本質を学ぶことができないのではないかと考えた。そこで本研究では、器楽の良さや奥深さを小学校音楽科授業の中でも十分に体験し、そこから様々な音楽の良さや表現を工夫することの楽しさなども学ぶことができることを目的とし、教育現場で活用可能な器楽教材作成（教材曲の作曲）に取り組むことにした。

第1章では、器楽教育が軽視される原因として考えられる点をいくつか取り上げて考察した上で、現在使用されている小学校音楽科教科書の器楽教材の部分に焦点を絞って分析をした。その結果、曲の難易度や学習目的などに関する様々な問題が浮かび上がった。

第2章では、教科書の教材分析から浮かび上がった問題点を整理し、その分析結果を基に、問題点の改善を図るために新たな器楽教材を開発した。開発した教材は合奏曲が3つと、打楽器導入教材が4つである。

第3章では、開発した器楽教材の一部を現職の小学校教師に見てもらい、教材に対する意見や問題点を挙げてもらった。曲の長さや難易度など、挙げた問題点のほとんどが授業時間の制約に関係していることが明らかになった。そしてその意見に基づいて更に教材を改善した。

本研究を通して、本質的かつ効果的な器楽教育を音楽科授業の中で十分に行うためには、限られた時間の範囲内で取り扱うことのできる教材や、時間を有効に使うことができるよう考慮した教材が不可欠であると感じた。今回の研究を進めるにあたって、筆者の考えや願いと現職教師の声と行き違う部分もあった。このことから、教材開発にあたっては現場をよく知る教師との意見交換や話し合いなどが必須であり、実際に教育活動に携わる教師の協力なしでは良いものがないということも改めて痛感した。器楽教育でこそ教えられる音楽表現や音楽能力などをさらに深めていくとともに、子どもたちの豊かな音楽教育のためにより有効な教材を考えていくことが今後の課題である。